



**エクシオグループの基幹システム周辺更改にあたり、業務適応力が高く、変化にも柔軟に対応できる開発プラットフォームとして、intra-martを導入しました。**



### エクシオグループ株式会社

- 本社所在地 : 東京都渋谷区渋谷3丁目29番20号
- 設立 : 1954年5月17日
- 代表者 : 社長 船橋哲也
- 従業員数 : 連結17,056名 / 単独3,766名(2024年3月31日現在)
- 業務内容 : 通信キャリア事業・都市インフラ事業・システムソリューション事業

エクシオグループ株式会社は基幹システム周辺の更改にあたり、開発プラットフォームとして intra-mart を導入しました。そしてグループ内のエクシオ・デジタルソリューションズ株式会社をパートナーとして、グループ内での内製という新しいアプローチで更改を進めました。基幹システム周辺の更改、intra-mart の採用、内製化への取り組みとその効果について、エクシオグループ株式会社 DX戦略部 担当部長 システムイノベーション担当 小島勝章様、同部 担当課長 システムイノベーション担当 永田麻美子様にお話を伺いました。

## グループ会社を含めた I T の 利活用を推進する D X 戦略部

### ●エクシオグループ株式会社について 教えてください。

エクシオグループは通信キャリア事業、都市インフラ事業、システムソリューション事業を行っている会社です。もともとは日本全国の情報通信インフラ網をつなぐ会社としてスタートし、社会的なニーズに合わせて建物や電気設備へと提供する都市インフラ事業、システムソリューション事業へと領域を広げてきました。現在、通信キャリア事業が約4割、都市インフラ事業、システムソリューション事業がともに約3割の構成ですが、2030年には3分の1ずつの構成となることを目的に事業を推進しています。

また、グループ会社は142社あり、グループ事業の再編を進めています。



### ●D X 戦略部の役割について 教えてください。

D X 戦略部は、グループ会社も含めた I T の利活用推進の役割を担っています。エクシオグループ自社内の整備、つまり大きな基幹システム（S A P）の更改を進めるとともに、グループ会社に向けてシステムの共有、セキュリティの強化など、I T ガバナンスにも取り組んでいます。

## コンポーザブルアーキテクチャの 考え方に則る

### ●エクシオグループでは、約5年前から 基幹システム周辺の更改を進めています。 どのような方針で臨まれましたか。

前回の導入当時はポストモダン E R P の考え方で、多くのアドオンを使って自社に適した業務処理を行っていました。

今回はコンポーザブルアーキテクチャの考え方に則り、更新の方針は Fit to Standard とし、適用外の業務は SaaS（パッケージ）を選定して活用。それでもなおギャップがある業務に関しては、ローコード開発で進めることにしました。実際のところ、基幹システム周辺は O S とハードウェアの E O S により、限界に近づいていましたので、そこから着手することにしたのです。

つまり更改を3つの領域に分け、段階的に導入するという

アプローチです。その領域は、

- ① S A P に残す領域
- ② SaaS 等の専門パッケージを利活用する領域
- ③ ローコード開発プラットフォームを利用する領域となります。



D X 戦略部 担当部長  
システムイノベーション担当 小島勝章様

### ●更改にあたっての課題を教えてください。

20年近く前に作られたシステムですので、どういう考え方に基づいて作ったのかをわかっている人が、周囲にいない状況でした。システムそのものがどういう動きをするのかはわかりますし、それを設計書的に表現されたものは残っています。その裏側にあるもの、どういう思想に基づいて、こういう設計にしたのかは推察せざるを得ませんでした。それが最初大変だったことです。

次に大変だったことは、システムが作られた20年前と今日では、エクシオグループの事業内容が大きく違っていることです。20年前のメインは通信キャリア事業でしたが、今日ではそれに加え都市インフラ事業、システムソリューション事業の3本柱になっています。システムと今日のエクシオグループの事業を照らし合せて、合っているのか合っていないのかを確認しました。合っているところは残し、違っているところはカットするなど選別が必要になり、この作業にかなりの時間が必要でした。

実際のところ、私たちも手探りの状況でしたので、必要に応じてユーザーである各事業部で実際に使っている皆さんの意見を聞き、私たちの考えが間違っていないことを少しずつ確認しながら進めました。一見必要でもいらないもの、逆に最初はいらなかったものでも、よく考えると必要だったり、その見極めはとても困難でした。

### ●システムだけでなく、業務内容の変化が 更改の内容に大きく影響するんですね。

そうですね。20年前は通信キャリア事業が主でしたので、使われている用語も通信キャリア事業の用語です。そのままでは都市インフラ事業、システムソリューション事業にはそぐわない用語もありました。ただ、通信キャリア事業では用語が変わるわけではありませんので、そのままでもいいわけです。

このように事業内容が多様化したことに対しても、標準化を視野に入れて対応していく必要がありました。同時に事業内容などがさらに多様化していったとしても対応できる、改変に強い開発プラットフォームが必要になります。また、後にシステムを修正する際に私たちと同じ苦労をしないように、システム作りの可視化をしていきたいと考えました。

また、以前とは大きく異なるアプローチを採ることにしました。それはエクシオグループ内での内製化で進めることです。



## 業務適応力が一番適している開発プラットフォームとして intra-martを導入

### ●内製化を選択した理由をお聞かせください。

前回の更改は外部の大手ベンダーに依頼しました。ただ、外部に依頼した場合、ブラックボックス化しやすくなります。何かシステムに問題が起きても、自分たちですべての対処ができず、ベンダーに問い合わせないとわからないことが多々出てきます。その分、時間もコストも必要になりますし、スピーディーな対応がしにくくなるのです。

内製化することでブラックボックス化は防げます。そしてグループ内に技術、ノウハウを蓄積し、そこで得たものをお客様に展開していくことも視野に入れています。

内製化は、グループのエクシオ・デジタルソリューションズ株式会社（EDS）とともに進めています。EDSはエクシオグループのシステムソリューション事業の中核企業に位置づけられています。これまでもエクシオグループとしてさまざまな開発に携ってきた実績がある企業ですし、優秀な開発メンバーも揃っています。

### ●変化に対応できる開発プラットフォームとして intra-martを導入されましたが、どのようにして選ばれたのですか。

更改前のシステムでも、基幹システム周辺はintra-martを使っています。ただ、改めてintra-martやSalesforce、ServiceNowなど複数の製品比較評価を実施しました。

その結果、業務適応力、つまりエクシオグループの業務を作り込むのに一番適している開発プラットフォームとして、intra-martを導入しました。



DX戦略部 担当課長  
システムイノベーション担当 永田麻美子様

## 更改と同時に業務の標準化を進める

### ●実際の更改の進め方、スケジュールについて教えてください。

先の3つの領域のうち、②SaaS等の専門パッケージを活用する領域と③ローコード開発プラットフォームで開発する領域について、まず業務の内容を見極めました。

②に該当するものとして、人事・給与系、購買系（購買管理）、経費系が挙げられます。こちらについては、SaaS等の専門パッケージを活用して進めました。ですので、パッケージ内容と業務との親和性が高いものは比較的早期に更改できました。

③のローコード開発が伴う業務としては、営業系（案件・契約・請求管理）、施工系（原価管理）などが挙げられます。こちらは業務部門と内容を調整して、開発を進めていきました。

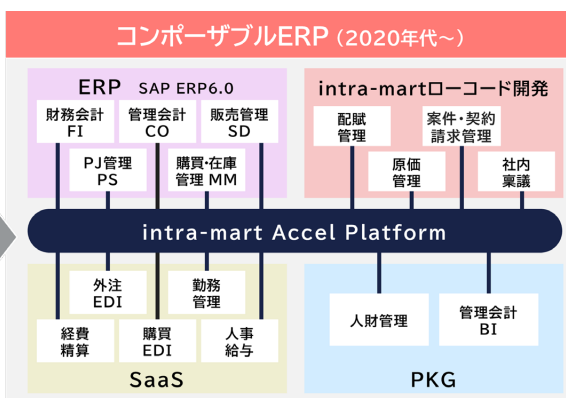
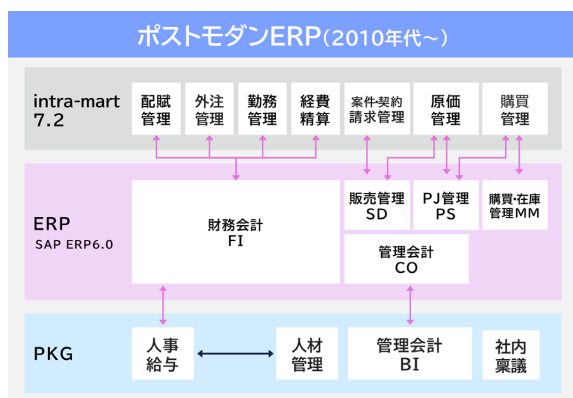
### ●SaaS等の専門パッケージを活用する際の具体例を教えてください。

今回の方針は Fit to Standard です。パッケージの内容にできるだけ実際の業務を寄せていきました。人事・給与系を例にお話すると、人事・給与制度は会社の数だけあるような状況でした。会社ごとで成り立ちなどが違いますので、どうしても違いが出ていたのです。

今回更改するシステムは、エクシオグループ本体だけでなく、導入を希望するグループ会社にも展開していきます。そこでグループ各社に人事・給与制度の見直し、業務の標準化を進めてもらい、結果として数種類の制度に集約できました。そして業務適用性を高めるためパイロットリリースし、社員説明を実施しながら、ブラッシュアップするという、開発方法の工夫も行いました。結果として、方針通りの更改が実現できたと考えています。

### ●ローコード開発が必要となる業務についてはいかがですか。

先にお話したように20年前に作られたシステムとの、ギャップ（業務内容の変化）や必要となる機能の見極めが大変で、かつ時間がかかりました。そして時代の変化が激しい今日では、一度決めた仕様も長い開発期間の間に業務の内容が進化したり変更になる可能性があります。その変化に対しても、柔軟に追従していく開発姿勢で臨みました。



そして開発のスタイルは全機能一括ではなく、一部の画面（モックアップ）を作ってユーザー側に確認してもらい、次のステップで横展開していくやり方を取りました。ローコード開発ツールとしては、IM-BloomMakerを活用しました。IM-BloomMaker自体が、世に出てまだ3～4年で、扱える技術者が少ない状況でのスタートでしたが、EDSでは人を育てつつ、ベトナムのオフショアを活用した開発で生産性を上げていきました。

スケジュールの具体例として、施工系（原価管理）は2023年8月にエクシオグループ自社内での更改を行いました。そこでユーザーに使用感などの確認をもらい、修正が必要な部分はタイムリーに修正を行い、グループ会社への展開を終えたのが2024年5月です。

### ●グループ内での内製化で進めていますが、その効果、メリットをどう感じましたか。

#### 1. 内製での更改を実現

今後も業務の変化や新しい要素の登場などにより、改修やメンテナンスは必要になります。そうした際もシステムのブラックボックス化はありませんし、グループ内で対応できるようにする、内製化する意図、方針は実現できました。

#### 2. 更改と同時に業務の標準化を実現

先にお話した人事・給与系のように、システムの更改と同時に業務の標準化を進めてきました。更改の方針であるFit to Standardを、開発担当者だけでなく、各業務の担当者が理解して対応してくれたことに感謝しています。

#### 3. 今後、大幅更改がない業務を実現

SaaS等の専門パッケージを活用する形で更改を進めてきた業務に関しては、今後の大幅更改はなくなりました。大げさな言い方をすれば、システム管理者としての宿命から開放されたといえるでしょう。



## HANA化を見据えた準備ができつつある

### ●基幹システム周辺の開発をほぼ終わりました。今後の予定について教えてください。

私たちが担当している基幹システム周辺でいうと、AIをうまく組み込んで、さらに業務を効率化する、より一層の自動化をめざしていくことに、今後取り組んでいきたいと考えています。

そして今後の更改では、3つに分けた領域のうち、①SAPに残す領域にこれから取り組んでいくことになります。2027年の保守サポート期限終了をにらみ、HANA化を見据えた準備はすでにできつつあると考えています。いままでの取り組みで、周辺業務の業務標準化を実施できたことで、ERP本来のパフォーマンスを出せる下地は整ったと判断しています。

### ●EDSへの期待、リクエストなどありましたら教えてください。

今回、基幹システム周辺の更改にあたり、新しい開発方法へのアプローチや一体感を持つての開発姿勢など、評価すべき点が多々あったと思います。これから本番を迎えるHANA化に関しても、十二分に実力を発揮してくれることと思います。

そして蓄積した技術やノウハウをエクシオグループだけでなく、当社グループのクライアントに対して積極的に提供していただけるよう、大いに期待しています。

お忙しい中、貴重なお話を  
お聞かせいただきありがとうございました。

取材日時 2024年7月  
エクシオグループ株式会社  
<https://www.exeo.co.jp/>

※記載の所属、役職名等は、2024年7月時点のものを記載しています。  
※「intra-mart」は株式会社NTTデータ イントラマート様の登録商標です。

左側：左から、エクシオグループ株式会社  
小島勝章様、永田麻美子様  
右側：左から、  
エクシオ・デジタルソリューションズ株式会社  
執行役員 ソリューション本部 副本部長 兼  
サービスプラットフォーム事業部 事業部長  
白井英行  
ソリューション本部 サービスプラットフォーム事業部  
第二PFユニット ユニット長 寺田喜徳